

乗り物としてのマリアン・ムーア

—— 「スウェーデンからの四輪馬車」小考 ——

森 田 孟

マリアン・ムーア (Marianne Moore, 1887-1972) は、1944年の *Nation* 誌 3月11日号に、“A Carriage from Sweden” (CP. 131-33)¹ を発表した。一連五行の十二連から成る詩である。

A CARRIAGE FROM SWEDEN

They say there is a sweeter air
 where it was made, than we have here ;
 a Hamlet's castle atmosphere.
 At all events there is in Brooklyn
 something that makes me feel at home.

No one may see this put-away
 museum-piece, this country cart
 that inner happiness made art ;
 and yet, in this city of freckled
 integrity it is a vein

of resined straightness from north-wind
 hardened Sweden's once-opposed-to-
 compromise archipelago
 of rocks. Washington and Gustavus
 Adolphus, forgive our decay.

Seats, dashboard and sides of smooth gourd-

rind texture, a flowered step, swan-
 dart brake, and swirling crustacean-
 tailed equine amphibious creatures
 that garnish the axle-tree! What

a fine thing! What unannoying
 romance! And how beautiful, she
 with the natural stoop of the
 snowy egret, gray-eyed and straight-haired,
 for whom it should come to the door ——

of whom it reminds me. The split
 pine fair hair, steady gannet-clear
 eyes and the pine-needed-path deer-
 swift step ; that is Sweden, land of the
 free and the soil for a spruce-tree ——

vertical though a seedling —— all
 needles : from a green trunk, green shelf
 on shelf fanning out by itself.
 The deft white-stockinged dance in thick-soled
 shoes! Denmark's sanctuaried Jews!

The puzzle-jugs and hand-spun rugs,
 the root-legged kracken shaped like dogs,
 the hanging buttons and the frogs
 that edge the Sunday jackets! Sweden,
 you have a runner called the Deer, who

when he's won a race, likes to run
 more ; you have the sun-right gable-
 ends due east and west, the table
 spread as for a banquet ; and the put-

in twin vest-pleats with a fish-fin

effect when you need none. Sweden,
 what makes the people dress that way
 and those who see you wish to stay?
 The runner, not too tired to run more
 at the end of the race? And that

cart, dolphin-graceful? A Dalén
 light-house, self-lit? — responsive and
 responsible. I understand ;
 it's not pine-needle-paths that give spring
 when they're run on, it's a Sweden

of moated white castles — the bed
 of white flowers densely grown in an S
 meaning Sweden and stalwartness,
 skill, and a surface that says
 Made in Sweden : carts are my trade.

スウェーデンからの四輪馬車

空気が爽やかなのだという
 それが作られた所は、私たちのここよりも。
 ハムレットの城のような大気なのだ。
 とにかくブルックリンにあるのだ
 何か私を寛がせてくれるあるものが。

誰も見ないのかも知れない この仕舞ってある
 博物館の一品は、この手作りの四輪馬車は
 内部の幸福のせいで芸術になっているのだが、
 それでも、この都市の染みだらけの
 完全さの中では それは樹脂加工

された真当さぶりを示しており 北風に
 鍛えられたスウェーデンの かつて妥協に
 抵抗した岩々の列島から
 来たものだ。ワシントンとグスタフ
 アドルフよ、私たちの腐敗を許したまえ。

座席、泥除け前板に滑らかな瓢箪の皮ふうの
 肌ざわりの側面、花飾りの施された踏み板、白鳥の
 矢のプレーキ、そして渦巻く甲殻類の
 尾をした馬に似た水陸両棲の生物たち
 それが車軸棒を装飾しているのだ！ 何という

美事なものか！ 何という焦々させられない
 空想物語か！ そして何と美しいことだろうか、彼女は
 雪小鷲の自然な身の
 屈め方をして、灰色の眼で 髪を真直ぐ伸ばしているが
 その人を それは戸口まで出迎えに行ったことだろう――

その人をそれは私に思い起させるのだ。裂けた
 松の金髪、不動のカツオドリの澄んだ
 眼 それに松葉の散り敷く小径を行く鹿の
 素早い歩みぶり、それがスウェーデンなのであり、自由な
 人々の国、トウヒの木が育つ土地――

直立してはいるが若木――全てが
 針だらけ。緑の幹から、独力で扇のように
 拡がってゆく緑の棚また棚から。
 厚底の靴で 白い長靴下を穿いての
 舞踏！ デンマークに庇護されたユダヤ人たち！

パズルジョッキと手織りの敷物、
 犬のような形をした木の根の脚の瘡馬
 ぶら下っているボタンに、日曜日の

上着を縁取る装飾留め金！ スウェーデンよ、
そなたには〈鹿〉号と呼ばれる競走馬がいるが、彼は

競走に勝つと、もっと走り

たがる。そなたには太陽の権利をもつ切妻
壁があって 東西に真向かっており、テーブルは
宴会のためにように広げられており、嵌め
込まれた一對の胴衣のブリーツは 魚の鱗の

効果をみせる、そなたが何も必要としない時には。スウェーデンよ
何故人々はそのような服装をし

そなたを見る人々は滞在したいと思うのか。
あの競走馬よ、疲れすぎてもうこれ以上走りたくなくなることはないのか
競走も終りの時になって。そして何故あの

四輪馬車は、イルカの優雅を示すのか。ダレーン
燈台は、自己点火するのか—— 敏感に反応し
責任を負って。私には分る、
走り抜けられる時に弾みを与えるのは
松葉の散り敷く小径ではない、それは堀で囲まれた

白い城を幾つも持つスウェーデンなのだ—— 花壇なのだ
白い花々がびっしりとS形の中に育っているが
それが意味するのは スウェーデンとすごい頑丈さ
優れた技術と素晴らしい表面 それに言う
スウェーデン製；馬車は私の職業、だと。

一読まず判ることは、この詩の語り手がブルックリンの博物館に収蔵されて
いたスウェーデン製の四輪馬車を見て、その時代物の手工芸品の美事に心打
たれ、それに乗っていた筈の婦人の容貌・服装、及び、こういう芸術品を産み
出した国の地勢や文化に思いを馳せて、スウェーデンを讚美した作品だ、と
いうことだろう。それを、馬車の細部を、連想と譬喩を駆使して華麗な心象を連
ねて具体的に描写し、知らない外国を想像力を飛翔させて活写しながら成就し

ていて目ざましい詩篇であるが、確かに、W. T. Scott でなくても「奇矯な観察」(A 1. 46) だとは誰しも思うに違いないし、タフィ・マーティンの言う「風変わりな夢想者」(M.136) が髣髴とするが、この作品もムーアの典型的な「奇想を凝らした手法の詩」(W. 78) なのである。

生物学を専攻したムーアは、その豊富な知識を総動員して珍奇な動植物を種々様々に縦横無尽に詩作に活用したが、この詩でも馬車の具体的な描写に次々に使われる。“snowy egret” (雪小鷺) は、アメリカ大陸の温暖な地域に生息するシラサギで、かつてはその羽を利用するために乱獲された。“garnet” (カツオドリ) は、外洋性の海鳥の総称で、空中から海中へ突入して魚を捕る。“spruce” (トウヒ) は、マツ科トウヒ属の常緑針葉樹。その他、瓢箪、白鳥、甲殻類、馬に似た水陸両棲生物 [カバ?], 鹿、犬、独語のままの “kracken” (瘠馬、老いぼれ馬)、魚の鱗、イルカ、と現われるが、この作品には、むしろそれ程珍しいものは出て来ない。しかし、それらを使った譬喩が如何にもムーアらしくて、読者を幻惑する。それかあらぬか、「馬車の生彩を放つ外観が詩人の心眼を鼓吹して、スウェーデンという国の、同じように生き生きとした姿を想像させる」(M. 136-37) と正当な鑑賞を示すマーティンは、この作品を“A Carriage Made in Sweden”と誤記する。この標題で発表されたことは一度もなさそうなので (A 2, 参照)、明らかにマーティンの錯覚であろうが、論述対象の詩の標題を誤記するのは不思議といえば不思議だが、その位にこの詩は、妖しい魔力を秘めているということにもなろう。それがまた、1957年の頃には、ムーアは既に数々の賞を受けていて名声も高かったのに、未だその詩の価値について評価が定まっていなかった[W. T. Scott] (A 1. 61.) 原因でもあろうか。

この詩が、美事な出来栄の馬車とそれを産み出した国への単なる讃歌に留りそうにないことは、そしてムーアの詩作を少しでも知る読者には、この「は」は「も」となる筈だが、「私たちの腐敗を許したまえ」とか「デンマークに庇護されたユダヤ人たち」の詩句だけでも感取されるだろう。一筋縄ではゆかない作品がムーアの常なのであるが、詳しく見る前に、形式に注目する必要がある。

この詩が発表されてから十年後に、詩人の W. D. Snodgrass は、ムーアの優雅さに注目し、初期の彼女の詩が、「統辞・配語法上の巧妙さによってのみ活生化される会話体の調子」を有していたのに対し、この作品のような詩では、音節を重んずる故に律動に依らない作詩法に顕現される、音節に強調をおく韻律の反響と、行中 [間] 韻 internal rhyme の諸型とによって、音楽性を一層

高めている、と指摘した (A1, 61)。この詩では、内容の議論を「増幅」するのに音の工夫が役立っている、と見たグレイス・シュルマンは、議論の論理によるというより、連想という手段によって、現実の定義、スウェーデンの意味に、到達しているのだと言い、連想を支えるのが呼応し合う母音であり (“fair hair”, “clear/eyes”と“deer-swift”など)、各連の最終行に、行頭と行末を押韻させて、車軸が動いている感じを捉えていると看取した (S. 112)。各連の最終行とはそれぞれ5行目だが、順に見てゆけば、something-home(視覚韻)、integrity-vein, Adolphus-decay[ə→ei](疑似韻)、that-What, for-door, free-tree, shoes!-Jews, you-who, in-fish-fin, at-that, when-Sweden, Made-trade, である。各連共に、2行目と3行目が脚韻で押韻しているのはすぐ分るが、この、各連の最終行に見られる行頭と行末の押韻は鮮やかである。しかし、これで感心しているだけではすまないのが、この作品である。

A・キングズリー・ウェザーヘッドは、押韻 rhyme は、形式感を与えるものだが、ムーアの詩では目には見えるが聞こえないことがしばしばあると述べ、この作品の各連の一行目の3番目と最後の音節、及び、各連の最終行の最初と最後の音節 [今見たばかりだが] に見られる押韻は、聞こえるにしても如何に稀であることか、と感嘆した (W. 91-92)。各連第一行の3番目と最後の音節を順に見てみよう。

They say there-air, No one may-away, of resind-wind / Seats, dash-board-gourd, a fine thing!-unannoying, of whom it-split, vertical-all,
The puzzle-jugs-rugs, when he's won-run, effect when-Sweden / cart, dolphin-Dalén, of moated-bed, である。同一行、あるいは他の行の間頭の語との押韻である行中[間]韻 internal rhyme が、幾つも見られる詩であることはすぐに感じ取れるが、12連ある各連共に第一行と第5行に、これ程規則正しく押韻が隠されているとは、指摘されなければ容易には気付けない。全く端倪すべからざる詩人だが、こういう驚嘆に値する韻律によって、この詩は何を訴えたのだろうか。

*

ムーアは、1934年の3月に、ブルックリンの博物館に展示されているスウェーデン製の、美事な彫刻が施されている四輪の大型馬車を見た。これが十年後に、この作品に結晶した (Mo. 264)。感動を大切に時間をかけて暖めて詩化するのが、ムーアの常なのである。博物館 museum は、彼女が、図書館、美術館

と共に、好んで出かけた所であり、若書きの未刊のままの詩“Museums”もある。博物館は人を死者と殆ど接触させるものであり、「博物館は目にするものを楽しむことが出来る人々のために存在する」のであり、「価値があると思ってきたものと出逢うことで、精神を新鮮に再生しようとして人は博物館へ行く」と書いたが、この詩のことを紹介しながら、ボニー・コステロは、博物館がムーアにとっては、キーツにとっての壺同様、飽くなき好奇心を目覚めさせるものだと述べている (C. 190-91)。

“England”² (CP. 46-47), “Spencer’s Ireland”³ (CP. 112-14) 同様の作品も、合衆国 (Brooklyn, Washington) との対比によって進められると言うクリスタンス・ミラーは、第5～7連で、スウェーデンのあらゆる姿が浮上するとして、人種上・肉体上の遺伝子型 (金髪, 明るい目の色), 地勢 (岩が多く, 松の木に覆われた地域), 奇妙な慣習 (伝統的な踊りと靴), 近年の政治史 (スウェーデンがデンマークのユダヤ人に聖域を提供した) を挙げ, それらが一体となってスウェーデンを, 合衆国よりももっと忠実な「自由人のための国」にしているのだと示唆するのが, この詩だと見る。そういう避難所の提供を拒否すれば, 「自由人の国」を自称する権利を喪う危険を犯すのだという示唆だと言う (Mil, 162)。

政治史といえば, この作品を, ムーアの「絶えざる発明性」を示したものであり, 作者自身の知らない土地へ読者を連れてゆく様々な技巧を弄していると言うローレンス・ステイプルトンが, 詳述してくれる。この詩の持つ多様な展望は, 戦争の避け難い悪に収斂しながらも, 無分別な力と競い合う時代には, あらゆる公正なものが人間性を破壊するものに対抗して名告り出てくるのだと認めるのである (St. 127)。平和は, 美, 自由, 危険を伴う寛大さの迷路を通じて見えてくるものだ, と言うステイプルトン (St. 127-28) は, 個人と国そのものの生命, 美, 明晰さが一つの頂点に達して, Hitler がデンマークを征服したことによって脅威に晒されたユダヤ人たちにスウェーデンが進んで避難所の提供を申し出たことを正当化するのだとも述べる (St. 128)。

この作品は, *Nevertheless* 『にも拘らず』(1944) に収録された六篇の作品中, 最後に書かれたものだったが, *Nation* 誌に既に採用されていて校正刷を読んでいた時に, 作者が改作したのだという「顕著な事実」を最初に指摘したのもステイプルトンである。ムーアは, 1944年3月1日に, 兄の Warren に手紙を書いた。アドルフ・グスタフ五世 (1858-[スウェーデン王位1907-1950]) が, 「近隣のデンマークのユダヤ人たちに, 自国の扉を開いた」ことに言及す

るために改作したい、一寸した改訂で大いに改良されるから、編集者も私を助けてくれるだろう、びくびくしながら本文の変更を依頼した、という趣旨だった (St. 128)。George Washington (1732-99) は、Rhode Island 州の現在は夏の避暑地として知られる Newport にある合衆国最初のユダヤ人の会堂に出席し (St. 128)、その職務上の威厳を宗教の自由に与えた (Ph. 202) のだった。グスタフ・アドルフは、「その叡智と節度、宗教上の寛容、外国の工芸家への親切と教育改革で記憶される」(Ph. 202) し、「30年戦争で宗教上の寛容を示した代表者だから、この詩に現われてももはや何ら驚くべき人物ではない」(St. 128-29)。

ここで実に面白いのは、ステイプルトンが、グスタフ五世を、いつの間にかさり気なく、グスタフ二世 (1594-1632) に摩り替えてみせていることである。30年戦争とは、欧州中部の一連の宗教戦争 (1618-48) のことで、初めドイツのプロテスタントとカトリック教徒との衝突があり、後には、神聖ローマ帝国とスペインに対するフランス、スウェーデン、デンマークの政治上の敵対があった。この時期のスウェーデン王 (在位1611-32) は、国力を増大した国民的英雄でスウェーデン近代建国の父とされる別名“Lion of the North”ことグスタフ二世なのである。同時代のグスタフ五世だけでなくとも、唯、グスタフ・アドルフとのみあるのだから、この「北の獅子」も「この詩に現われても」確かに「何ら驚くべき」ではないだろう。

エリザベス・フィリップスは、この詩を、スウェーデンの中立に対する熱狂的な感激に近いものを表わしているとして、1944年3月1日にグスタフ・アドルフが、デンマークからのユダヤ人難民に自国の門戸を開ける決心をしたと知ったムーアが、印刷中だったこの作品に、「デンマークに庇護されたユダヤ人たち」の一行を入れるための改作を施した事実に言及した上で、ドイツの圧迫から既に逃れてきていたあらゆる国籍の他の多くの人々の避難所として、自由な国が持つ魅力に、ムーアが気付かないなどということはある得なかったのだ (Ph. 202) と熱い口調で述べている。

フィリップスは、この詩の巧みで微妙なアイロニーにも注目する。この美事な馬車は、完全さに染みがついている都市ブルックリンの博物館の、誰も見そうにない所に仕舞われているが、ハムレットの城への言及は、この城には血腥い問題がまつわっているのだから、「かつて妥協に抵抗した」の句の前でさえ、スウェーデンの完全さもまた疑問だ、ということを示唆している (Ph. 201-202)。大戦中、上辺は中立だったがスウェーデンは、1940年6月にノールウェ

イが陥落してからは、1943年の晩夏までドイツに譲歩していた。しかしスウェーデンの不安定な危い立場にも拘らず、「新秩序」[ナチス]との協力の故に、抗議は勿論、鋭い批判や手厳しい見方があった。詩人は、戦時の英雄ワシントンとグスタフの二人の名を喚起して彼らに、「私たちの腐敗を許したまえ」と要請する。この詩は明らかに、戦争の卑少な商業主義と対比して、美しい誠実に作られた馬車の、「焦々させられない空想物語」以上のものについての作品なのである (Ph. 202)。フィリップスもまた、興味深いことに、ワシントンと並べてグスタフを「戦時の英雄」と呼ぶことで、グスタフ五世と共にグスタフ二世のことも想起しているのではなからうか。同時代のスウェーデン王だけでなくその先祖の英雄も重ね合わせて呼び起こせるなら、この詩はそれだけ深くなるというものだろう。

「焦々させられない空想物語」については、パミラ・ホワイト・ヘイダスが、これを、馬車を描写する際に馬車が展示されている都市と対比させて讃えている、と述べている (H. 185) が、彼女は、この作品には、様式 style の点で「有効な表現性」を見せている (H. 21) と、軽く触れるだけである。ムーアの主要な作品について燃犀な論考を展開した研究者にしては、些か意外な感じがしないでもない。

馬車の構造そのもの、そして、車軸棒の「甲殻類の尾をした」装飾さえもが、「焦々させられない空想物語」を内包し、そして突然“In Distrust of Merits”「真価を疑って」⁴ (CP. 136-38) の最高調をなす美が現れる、と、この作品の「美」にも注目するのがスティブルトンである (St. 128)。因に、「焦々させられない空想物語」を讃えるというからにはムーアは、いや、この詩の語り手は、空想物語 romance には、「焦々させられる」のであろう。ムーアは、驚くばかりの読書家で稀書も多く精読していたが、空想物語は、余り好まなかったように見受けられる。

バーナード・F・エンゲルも、スウェーデンを「かつて」妥協に抵抗したというのは、と、「かつて」に注目した最も早い時期の研究者であった。これは、第二次世界大戦中にナチスの要求にスウェーデンが便宜を与えたことへの嘲りかも知れず、スウェーデンも高潔さ integrity の点で一般的に腐敗しているという示唆だけかも知れない (E. 105) と。「内部の幸福」が、芸術に結実する真正な技能を産み出すのだ、ということが、この詩には示されている (E. 105) というエンゲルの鑑賞を少し見ておこう。美事な作りのスウェーデンからの馬車が、ブルックリンの博物館にあって、その存在だけで、この「完全さに染み

がついている」都市では人を寛がせる。その正直な職人氣質のうちに、この馬車は染みの付いていなかった時代、ワシントンとグスタフ・アドルフの時代を思い出させる[ここで、エンゲルも、グスタフ二世を想起していることになる]。いずれにしろ、第5、第6連は、馬車の芸術性に富む造りと装飾、及びそれが想起させるスカンジナビア的美質を声高に叫んでいる。こう考えてくると当然のように、そのような生き生きした完全さや製品、「敏感に反応し／責任を負う」国民の、源と思われるものを推測するようになる。最後の7行の答えは、その源はスウェーデン人の地勢や地学ではなく、彼らが純粹さと想像力とを組み合わせ所持しているということにある、というものである。美、技術、廉潔さに価値を与えるのは、彼らスウェーデン人の倫理であり、こういう不屈の理想を実現しようと骨折りながら、スウェーデン人は必然的に芸術作品を産み出すのである、云々 (E. 105)。仲々、行き届いた鑑賞であろう。

客観的で具体的な物のもつ美点と、そういう美点に人間は匹敵できないのだという示唆との間の対比に、均衡がみられるのが、この詩及び同時期のムーアの諸作だと看するマーガレット・ホウリーは、この作品の馬車の具体的な理想は「ワシントンとグスタフ・アドルフよ、私たちの腐敗を許したまえ」に見られる抽象的な人間の脆さと隣り合わせにされていると述べる (Ho. 124)。ムーアの60年に及ぶ詩作の発展を、丹念に辿って見せたこの繊細な著者は、しかしこの作品には具体的に殆ど触れていない。

空想 (fancy) と想像力 (imagination) という古典的な対比でムーアの詩作を概観したウェザーヘッドは、第6連の暗喩で示された「裂けた松の金髪」に注目して、これは想像力の面で働くのだと言う (W. 78)。というのも、裂けた松は、白く、清潔で、新鮮で、甘美な匂いがして、固い自然の生き物、強さ、こういう特質に対する満足、といった観念を喚起するのだから。そしてこの暗喩は、その物に対する我々の目に見える明瞭な印象を減らす働きをする、と同時に、詩が生み出す観念を表出するために心象を主に使用するような作品を目立たせるのに、有効だと思われる (W. 78-79) と。暗喩は、それで表わされたものへの読者の印象を増す働きをする、というのが、その当初の機能であろうが、この場合の暗喩は逆の働きをして、別の役割を果している、と言うのである。ムーアの用いる暗喩の性格に新たな思いを到させる言ではある。

ムーアの精神は、結合、連結へ向かって働く。外部の様々な特徴や文化上の装飾などの個々の違いを十分に機能させる同一性、だと広く感じられるものへ向かって働くのが、彼女の精神だ、と言うミラーは、だからこの詩人は、ある

歴史上の機会や集団の中に常になく眼に見えるものでこれこそ人間一般のもつ力だと自分が見てとるものを賞讃するために、人種を利用するのだと述べる (Mil. 141)。「スペンサーのアイランド」では、アイランド人は、恍惚とする、誇り高い、詩的な、そして満足することのない人々であったが、この「スウェーデンからの四輪馬車」ではスウェーデン人は、素早く、寛大で、清潔な人種なのである。こういう詩では、人種は、特定の歴史上・社会上の状況の中で人間の特色を明確にするための有用な“lexicon” (語彙集) なのだ (Mil. 141) と。特定の人種の単なる賞讃ではなく、この作品のスウェーデン人も人間一般を考察するための材料だというわけだろう。ミラーは続ける。この作品は歴史的というよりは神秘的なままであるが、ムーアはここで、現代の出来事が、自分の描出したことを正当化するのだと、示唆しているのだ (Mil. 163) と。

この作品の最後の7行は、一連のS音、一続きの歯擦音を含むが、これは、おそらく、スウェーデン人と逞しい人々及び特殊技能者 (the sturdy and the skilled) との結びつきを強調する意図なのだ、と言うのはエンゲルである (E. 105) が、それはその通りであろう。

「馬車は私の職業」は、ムーアが独自のユーモアを發揮したもので、「内部の幸福が芸術にした」「樹脂加工された真当さぶり」を示す手細工の馬車は、この詩人が模範として提出したものだ、とフィリップスは言う (Ph. 70)。彼女は、この詩の最後の言葉を、調子が軽快で慎ましやかだ、と見、それは、もっと平和な時代への郷愁であると共に、暴力と破壊の真直中で担わせられる重荷感覚と生き残る戦略とを表現しているのだ (Ph. 203)、と解釈する。

Sは“Sweden”のみならず“stalwartness” “skill” “surface” (拙訳ではそれぞれ「すごい頑丈さ」「優れた技術」「素晴らしい表面」と、敢えて原作にない形容詞を付して「ス」の頭韻を踏ませたのだが) を表わすと主張されているが、これはムーアの多くの作品がそうであるように、詩の原理について書いているのだ、と観るのはチャールズ・モウルズワースである。“An Egyptian Pulled Glass Bottle in the Shape of a Fish” 「或るエジプト人がガラス壺を魚の形に引き伸ばした」⁵ の特徴であった、深みと表面との連結を行なっている。頑丈さと表面の喜び、陽気さ、決意、これらが、詩を統合させ駆り立ててゆく構成上の緊張を産み出す原理として、この二作品では結合されているのだ (Mo, 314) と。尚、ムーアは、友人の視覚芸術家 Laurence Scott から、詩作上の種々の素材や情報を受けたが、この作品の中でその仕事と言及されている技術者

“Dalgrén” についての情報もその一つだ、とモウルズワースは言う (Mo. 421)。作中の「ダレーン燈台」のダレーンは、ノーベル物理学賞を受賞した (1912) スウェーデンの発明家 Gustaf Dalén (1869-1937) のことではないか、と思われるが、モウルズワースの言う “Dalgrén” と同一人物なのだろうか。姓の綴りも音も違う。作中の別の、例えば、この作品の「主人公」の馬車、あるいは、他の作品、仕事の製作者だろうか。重要なことが今一つ明確でない。今のところ唯一の懇切で便利なムーア伝であるが、時々こういう隔靴搔痒感を与えられるのが、モウルズワースの著書である。因に、第8連冒頭の「パズルジョッキ」とは、びっくり瓶。17~18世紀頃の特別の仕掛けのあるジョッキで、中身をこぼしたり振り撒いたりしないで飲むようにと飲み手に挑むように作られたものである。

芸術家がたび「X線のような詮索する強度」で物体を見詰めると、その物はその芸術家の想像上の備品の一部になり、「無意識の肖像画」、新しい物になるのだ、と言うリンダ・レベルは、ムーアはこの作品で、そういう物を「作り出す」という逆説 paradox を探求している (L. 133) と観る。「表面 それに言う／スウェーデン製：馬車は私の職業、だと」という最終行は、スウェーデンで作られた馬車のみならず、ムーアによってブルックリンで作られた馬車のことも指しているのだ、と彼女は言う。最初の三連でムーアは、その馬車の二つの地勢上の故郷を対比させている、と述べ、“made” の反復にレベルは注意を促すが、“made” は最終連でもう一度現われ、確かに印象深く使われている。先刻触れたようにマーティンが、この作品の標題の中の “from” を “made in” と誤記した理由も、その辺りに起因するだろうか。

レベルは続ける。馬車がブルックリンの詩人に、彼女が第4連以降で描出するスウェーデン人を想像する機会を与える。彼女は想像上ではなく推測した国を創り出すために、読書から事実や心象を集めるのだ。彼女が描き出す馬車は、確かに存在しどこか他の所で作られたものではあるが、この詩の語り手は想像で、馬車をその母国共々創り出すのである、「誰も見ないのかも知れない

この仕舞ってある／博物館の一品は」とあるのだから。見ることは想像することであり、想像することは作り出すことだ (L. 133) と。ムーアを視覚芸術との関連の中で新たに見直したレベルは、実在のスウェーデン製の馬車を見た語り手が、詩の創作によってその詩の中に想像力によって自分自身のための馬車を、博物館のあるブルックリンで「作った」のだ、と言うわけである。そう言えば、最終行は、“carts are my trade” と、馬車はいつの間にか複数形に

なっている。初めは、「この手作りの馬車」(this country cart)と単数だったのである。確かに、語り手は、詩作の過程で、別の馬車を作り出したのだ！物を見ることに始まる〈詩作〉という作業の本質を、この作品の中にレベルは凝視したのだと言えよう。また、この詩は優れた読者に、そのような凝視を促す作品だったのである。

それにしても、この詩の結びの一文は片言めいており謎がかっているが、最終行は一行の全てが、この馬車の側面あたりの「表面」に書かれている文字なのだろう。「スウェーデン製：馬車は私の職業」、そう書いてあるのだ。馬車を作るのは私の職業だ、とこの馬車の製作者が宣言しているのであり、それでこそ、「馬車」が複数形になっていることが分る。「私」は馬車というものを何台も作る職人なのだから。最終行の冒頭が大文字で“Made”となっているのも肯けよう。行頭と行末が押韻しているとは洒落ている。彼らはこういう感覚に長けているのである。昔、滞米中に本稿の筆者は、ニューイングランドのとある果樹園に何度も出かけたが、そここの入口の巨大な林檎の置物には、こう書いてあった。

“ If satisfied, tell others.
If not, tell us. ”

「御満足でしたら、他の方々に。さもない時は、私共に、お知らせ下さい [改善します]」。簡潔で十二分に意を尽し、対句になって韻律美を備えて、誠に美事な宣伝文句で、しみじみ感じ入ったものだった。私がこの林檎園を幾度も訪れたのは、果樹園の内容のせいというよりも、この文句に逢いに行ったようなものだったであろう。閑話休題。

思うに、ムーアが博物館で見た馬車はスウェーデン製なのであり、田舎の手作りであるから、文字はスウェーデン語で書かれていたのではなかろうか。まさか合衆国への輸出用に作られたものではないだろうから。移民が故郷から運んできたものだったか。しかし、英語で書かれていたことも十分考えられはする。この文章までムーアが創作したとは考えないでおこう。とにかく、もしかすると、この一行で締め括る作品を構想した時に、各連の最後の行は、全て行頭と行末に押韻させることを思い付いたのではなかったろうか。

最後の一行が、馬車の「表面」に書かれていた文章であることは勿論知りながら、従って、“my”はこの馬車の製作者を表わすことは承知の上で、レベルは先刻のような議論を展開したのであろう。確かにいつの間にか、あの“my”が、この詩の語り手と重なって感じられてしまうのである。馬車という乗り物

を提供するのが、私の職業だ、とこの詩は訴えているように思われてくる。

ムーアは、広範で膨大な読書をしなが、あらゆるものの中から詩の素材を探したが、この作品を書くに当たっても、*Peasant Art in Sweden, Lapland, and Iceland* から大部の覚え書きや抜き書きを作っており、使うつもりや部分に赤線を施していることを、レベルは知らせてくれる (L. 205)。

Jeffrey D. Peterson の報告がある。Harvard 大学での詩人朗読会 (1964-65) でムーアがこの詩を読みました後、彼女は、「Sは私がお気に入りのアルファベットの文字です」と言って、聴衆をどっと笑わせた。次々に機智を発揮して笑いを誘った後、こう述べた。W. H. Auden は言ったものです。自分で詩の朗読を中断する時は説明すればよい、これは脱線です、詩の一部じゃありませんと [笑い]。さて、私は、むしろ古い分泌物の方が気に入ってしまったので、非常に多く脚注を述べなければなりません [笑い] (Wi. 229)。

長年、素材を温め思いを凝らしながら、この詩の場合にも、読書や経験からの多くの準備が、背後で積み重ねられていたのである。

ブルックリン博物館所蔵の骨董のスウェーデン製の馬車に触発されて書かれたこの作品は、ロビン・G・シュルツの言う通り、ムーアの「戦時の抒情詩の多くの調子と様式を反映して」いる (Sch. 169)。華麗な技巧を駆使して対象を入念詳細に描写しながら、ムーアは徐々に、この馬車が戦時の世界にとって持つ意味を明らかにし、この馬車にその装飾を施された表面を遥かに越えた道徳上の価値を付与するのだ (Sch. 169)。第二次世界大戦中、軍時上の中立を保った少数の国々の一つが創り出した産物であるこのムーアの、スウェーデンの「反応し責任を負う」馬車は、同情、「すごい頑丈さ」及び、ムーアに「デンマークの聖域を提供されたユダヤ人たち」を思い出させる、邪悪に対する抵抗、の象徴になるのだ (Sch. 169)。ムーアはこうして、仕舞っておかれた博物館の品に生命を吹き返させ、過去から現在へと動かして、自分の誠実を戦時目的のために犠牲にするのを拒む人々を、現時点で想起させる重要な要素にする (Sch. 169)。兵士の動きや大殺戮 Holocaust の残虐さに直接呼びかけたりはせずに、ムーアは、憎悪や破壊を示す現代の圧力を押し除ける希望を持たせてくれる美と知性の過去の産物を提出するのである (Sch. 169)。シュルツの深く行き届いた鑑賞であるが、この最後と似たことはフィリップスも述べてくれる。

十分に力の籠った言葉で表わされることが決してなかった悪を、ムーアが扱う際の繊細さは、彼女が明確化しようと骨折る良心の切迫した命令とは相入れ

ないと思われるかも知れない。彼女は強制収容所の極悪非道や、大虐殺ホロコーストの大量殺人については書かないで、その代わりに、絶滅した鳥たち、その痕跡と伝説とからしか知り得ないロック (roc), ニュージーランドにいたモア (moa), 無害だったオオウミスズメ (great auk), ダチョウ (ostrich) などについて書くのである (Ph. 203) と。この鳥たちは、いずれも “He ‘Digesteth Harde Yron’” 「彼は『鋼鉄を消化する』」⁶ (CP. 99-100) に出てくる。

*

「スウェーデンからの四輪馬車」は、ムーアが1940年代の初めに雑誌に発表した六篇を集めて1944年に公刊した *Nevertheless* の四番目に収められた。この標題は、この六篇が、その前の詩集 *What Are Years* 『年月であるもの』(1941) での主張を限定していることを示しているようだ、と見るエンゲルは、次のような見解を述べる。ムーアは自らの詩作品でいつも、勇気、技能、自己への正直、を強調したものだが、*What Are Years* では「優雅と愛」に主な価値を置いた。しかし、そういう究極のものだけに自分が関心を抱いているのだと読者に思われなくなかったのであり、日常生活では「勇気とそれに纏わる色々な価値」が直接必要なのだと、今度の詩集では言いたいのだろう (E. 101) と。

ステイプルトンは、「スウェーデンからの四輪馬車」を *Nevertheless* の中の他の作品同様に、次のような事を具体化したものだと観る。作者自らが言う「決然たる精神」(peremptoriness) —— 即ち、第二次世界大戦の中心の争点は、平和と自由という永遠の問題に関して自らの立場をはっきりさせ、我々はこの様々なあらゆる価値を知っているのだと断言することでその中心の争点の一つの立場を進んで採ることだという深い確信を、具体化したのだ (St. 129) と。

やはり当然ながら、この詩が収録されている詩集の他の作品も見ておく必要がある。まず、*Nevertheless* の最初の、標題詩を見てみよう。

NEVERTHELESS

you've seen a strawberry
 that's had a struggle; yet
 was, where the fragments met,

a hedgehog or a star-
 fish for the multitude

of seeds. What better food
than apple-seeds — the fruit
within the fruit — locked in
like counter-curved twin
hazel-nuts? Frost that kills
the little rubber-plant-
leaves of *kok-saghyz*-stalks, can't
harm the roots ; they still grow
in frozen ground. Once where
there was a prickly-pear-
leaf clinging to barbed wire,
a root shot down to grow
in earth two feet below ;
as carrots from mandrakes
or a ram's-horn root some-
times. Victory won't come
to me unless I go
to it ; a grape-tendrill
ties a knot in knots till
knotted thirty times, — so
the bound twig that's under-
gone and over-gone, can't stir.
The weak overcomes its
menace, the strong over-
comes itself. What is there

like fortitude! What sap
 went through that little thread
 to make the cherry red !

(CP.125-26)

にも拘らず

あなたは見て来たのだ 苦闘して
 きたイチゴを、その上
 存在したのだ、物の破片が会う所には、

ヤマアラシやヒト
 デが多数の種子を
 求めて。何かもっと良い食べ物があるだろうか

林檎の種子以上に —— 果実の
 中の果実 —— 閉じ込められていて
 逆向きに互いに曲がっている一対の

ハシバミの実に似ているが。霜が枯らすのは
 あのゴムタンポポの茎の
 小さなゴムの木の葉だが、その根には

害は与えられない。根は依然として生長するのだ
 凍った土の中で。かつて
 ヒラウチワサボテンの

葉が鉄条網に絡みついていた所に
 根が生えて生長していったのだ
 大地の中へ 二フィート下へと

ニンジンが曼陀羅華や
 ヨーロッパミズヒラマキガイの根のように時々
 なるように。勝利は私のところには

やって来ない もしも私がそこへ向って
行かない限り。葡萄の巻きひげは
結び目に結び目を結んで 遂には

三十回も結びつく——それで
上を下をと縛られた
小枝は 動けないのだ。

弱者は 受ける脅威に
打ち勝ち、強者は自らに
打ち勝つ。何かあるだろうか

不屈ほどのものが！ どれ程の樹液が
あの小さな糸の中を貫入していることか
サクランボを赤くするのに！

各連3行の11連から成る詩で、どの連も2行目と3行目が脚韻を踏む。ムーアの常で動植物がびっしり現われる。斜字体で印刷されている“kok-saghyz”[kóuksəgí:z]「ゴムタンポポ」は、キク科の植物でカザフスタン共和国産、太い根からゴム状の乳液を出す。“Russian dandelion”ともいう。“mandrakes”「マンダラゲ（曼陀羅華）」は、ヨーロッパ産ナス科の植物。麻酔性の有毒多肉質の根が二つに分れて人体を想わせ、地面から引き抜かれる時に叫び声を出すといわれた。媚薬とする俗信も知られる。他に植物は、苺、林檎、ハシバミ、ヒラウチワサボテン、人参、葡萄、サクランボ、と合計9種類、動物は、ヤマアラシ、ヒトデ、ヨーロッパミズヒラマキガイ（水族館で清掃用に飼われる）の三種類が現われる。

この作品、初出時（*Contemporary Poetry*, 3, No. 2. Summer 1943）の標題は、“It Is Late, I Can Wait”「遅くなってる、私は待てる」となっていた。“Late”と“Wait”とが押韻している（拙訳でも敢えて押韻めかした）。

この詩を、“The Paper Nautilus”「アオイガイ」⁷での、愛のみが信頼に値する岩だという主張の継続、その幾らか手加減したものだと看做すエンゲルは、にも拘らずこの作品は、生き残るには主として勇気が必要なのだと言っているように見える、と述べる（E. 101）。この詩は、非常に困難に直面した際

の一連の勇敢な行動の例を提出しているのだ、として、エンゲルは引き裂かれた時にさえ芸術作品のようにみえようとしている苺、閉じ込められていても整然たる模様を成している林檎の種、凍土の中で生き残るタンポポゴムの木の根、鉄条網に絡めとられても地中に芽を出すヒラウチワサボテンの葉、を挙げ、これらは囚われの裡にあっても勝利を取める例なのだ。監禁状態にも拘らず、それ故にさえも、生存を勝ち取る可能性を示している植物界からの模範例として役立てられているのだ (E. 101) と。エンゲルは続けて言う。こういう英雄的な行動は、断固たる行為のために必要なのだ、ということはこの詩は示す、「勝利は私の所には／やってくる もしも私がそこへ向って行かない限り」なのだから。ムーアの作品の常で、こういう伝達内容は散文の分析とか説明といった手法で入念に示されることはなくて、直ちに、勇敢な努力の例を更に別に挙げてゆく。結び付き続けながら妨げてくる小枝を窒息させる葡萄の巻きひげのように。実際、勇気によってこそ弱者はその弱さを克服できるのだし、強者は自らを制することが出来る。この詩は「不屈」の最後の例——その脆さにも拘らず果実に必要な樹液を運ぶ桜桃の幹——を挙げて終る。“The Paper Nautilus”で究極の価値として挙げられた「愛」は、勿論一つの理想であるが、それ〈にも拘らず〉勇気の重要さは忘れられてはならないのだ (E. 102) と。最も早い時期に、ムーアの詩作の行き届いた平易な鑑賞を披露して、彼女の世界に読者を近づけてくれたエンゲルのせいで、この動植物の生態を微細な観察によって描出した詩と見えるものが、実は「不屈」「勇気」を奨揚した作品だと判る。「抵抗する決意」というのがムーアの詩の中心主題であるが、それが *Nevertheless* 一巻の標題そのものに書き込まれている、と言うコストロは、この標題作「にも拘らず」を闘争と生き残りの詩だと総括する (C. 116)。

この巻頭の詩に続くのが次の作品 (CP. 127) である。ムーアの詩の多くに見られるように、作品の題が即、本文の主語になっている。

THE WOOD-WEASEL

emerges daintily, the skunk ——
 don't laugh —— in sylvan black and white chipmunk
 regalia. The inky thing
 adaptively whited with glistening
 goat-fur, is wood-warden. In his

ermined well-cuttlefish-inked wool, he is
determination's totem. Out-
lawed? His sweet face and powerful feet go about
in chieftain's coat of Chilcat cloth.
He is his own protection from the moth,

noble little warrior. That
otter-skin on it, the living pole-cat,
smothers anything that stings. Well, ——
this same weasel's playful and his weasel
associates are too. Only
Wood-weasels shall associate with me.

初出 *The Harvard Advocate*, 128 (April, 1942), 11.

森イタチ

が 上品に現われ出る、スカンクが ——
笑ってはならない —— 森に住む白黒のシマリスの
正装で。そのインクのようなものは
適応性も豊かにきらめく山羊の被毛で
白くされていて、森番を務める。冬毛が
白くなるコウイカのインクに十分まみれた毛織物をまとった彼は
決意の族^{トータム}霊だ。除け
者だって？ 彼の優しい顔と力強い両脚は動き回るのだ
チルキヤット族の布の酋長の上衣を着て。
彼は蛾から自らの身を護るのであり

気高い小さい戦士なのだ。あの
身につけているカワウソの皮膚、生きているケナガイタチは
刺しに来るものは何でも窒息させる。そう、 ——
この同じイタチの陽気な、そして彼のイタチの
仲間たちもまたそうなのだ。唯

森イタチだけを私の付き合う相手にしよう。

「トーテム」は言うまでもなく、特に北米先住民族の間で氏族、家族、集団の象徴と看做されるもので、鳥や獣などの生物が多い。「チルクヤット」は、アメリカ合衆国のアラスカ州南東部の太平洋沿岸地域に住む先住民である。「Polecat」には「ヨーロッパケナガイタチ」と北米産スカンク、の両方の意味がある。

この詩のエンゲルの鑑賞を聞いてみよう。「決然たる人々は、実際、最良の同僚、仲間だ」と告げる詩である、と彼はまず言う。少なくともこれは、この標題の生物のように、自らの置かれた状況の中でもユーモアの感覚を失わない人々には当て嵌る。この生物が「上品に現われ出る」という冒頭の表現には、この動物が実はスカンクであるというのを遅らせるユーモアがある。彼は黒くて白く「山羊の被毛」を身につけ、「森の番人」であると我々は告げられる。あらゆる細部描写が見窄らしいスカンクを、森と動物の主人である牧神パン(Pan) [ギリシャ神話の、上半身人間で脚は山羊] と結びつけることを示唆している。彼の白黒の毛皮ということ——この毛皮の色を反復して強調することが山羊人間パンとの連想を強化しているように思えるが——彼は正に注意の象徴である「トーテム」なのだ。無法者、除け者と見做されながらも彼は自ら頭かしらとして振舞う。そして必要とされる自己防禦が出来るのだ。それでも彼は陽気でふざけるのである。全く彼は美事な模範である (E. 102)。こう述べるエンゲルは、*Nevertheless* の中ではこの詩の最終行には“WOOD-Weasels”と最初の四文字が大文字表記で、一般に不評な通常の“weasel”とは異なることを示していたが、『完全詩集』(CP) では“Wood-”にしたことに注意して、もはやそのような強調はするまでもなく明らかだと認めたのだ (E. 102) と言う。

エンゲルは触れていないが、実はこの作品は、語句換綴遊戯 (anagram) を行っている「折り句詩」(acrostic) で、詩行の各冒頭一字を最終行から順に上へ辿ってゆくと、“Watson Hildegarde”となる仕掛けである。Hildegarde Watson は、*The Dial* 詩の編集者の妻で、ムーアの親友であった (Mo.40)。スカンクを「森イタチ」「Wood-weasel」と頭韻の造語で言い換え、その動物を別の動物、シマリス、コウイカ、カワウソ、ケナガイタチ (ここではスカンクの意なのだが) を譬喩に用いて描写しながら親友に擬しているわけである。冒頭の主語でもある標題の“The Wood-weasel”は最終行の行頭の、複数形の

“Wood-weasels”と呼応しながらこの動物の種族を称え、森馳のような人々とだけ交際しようと表明した詩であった。確かに、不屈と決断とは叡智の特質を構成するものの二要素 (E. 102) である。

次の三番目に、ムーアの作品の中でも最も有名なものの一篇が収められる。(CP.128-30)

ELEPHANTS

Uplifted and waved till immobilized
wistaria-like, the opposing opposed
mouse-gray twined proboscises' trunk formed by two
trunks, fights itself to a spiraled inter-nosed

deadlock of dyke-enforced massiveness. It's a
knock-down drag-out fight that asks no quarter? Just
a pastime, as when the trunk rains on itself
the pool it siphoned up; or when — since each must

provide his forty-pound bough dinner — he broke
the leafy branches. These templars of the Tooth,
these matched intensities, take master care of
master tools. One, sleeping with the calm of youth,

at full length in the half-dry sun-flecked stream-bed,
rests his hunting-horn-curved trunk on shallowed stone.
The sloping hollow of the sleeper's body
cradles the gently breathing eminence's prone

mahout, asleep like a lifeless six-foot
frog, so feather light the elephant's stiff
ear's unconscious of the crossed feet's weight. And the
defenseless human thing sleeps as sound as if

incised with hard wrinkles, embossed with wide ears,
 invincibly tusked, made safe by magic hairs !
 As if, as if, it is all ifs ; we are at
 much unease. But magic's masterpiece is theirs ——

Houdini's serenity quelling his fears.
 Elephant-ear-witnesses-to-be of hymns
 and glorias, these ministrants all gray or
 gray with white on legs or trunk, are a pilgrims'

pattern of revery not reverence —— a
 religious procession without any priests,
 the centuries-old carefulest unrehearsed
 play. Blessed by Buddha's Tooth, the obedient beasts

themselves as toothed temples blessing the street, see
 the white elephant carry the cushion that
 carries the casket that carries the Tooth.
 Amenable to what, matched with him, are gnat

trustees, he does not step on them as the white-
 canopied blue-cushioned Tooth is augustly
 and slowly returned to the shrine. Though white is
 the color of worship and of mourning, he

is not here to worship and he is too wise
 to mourn —— a life prisoner but reconciled.
 With trunk tucked up compactly —— the elephant's
 sign of defeat —— he resisted, but is the child

of reason now. His straight trunk seems to say : when
 what we hoped for came to nothing, we revived.
 As loss could not ever alter Socrates'

tranquillity, equanimity's contrived

by the elephant. With the Socrates of
animals as with Sophocles the Bee, on whose
tombstone a hive was incised, sweetness tinctures
his gravity. His held-up fore-leg for use

as a stair, to be climbed or descended with
the aid of his ear, expounds the brotherhood
of creatures to man the encroacher, by the
small word with the dot, meaning know — the verb bud.

These knowers “arouse the feeling that they are
allied to man” and can change roles with their trustees.
Hardship makes the soldier; then teachableness
makes him the philosopher — as Socrates,

prudently testing the suspicious thing, knew
the wisest is he who's not sure that he knows.

Who rides on a tiger can never dismount;
asleep on an elephant, that is repose.

初出 *The New Republic*, 109 (August 23, 1943) 250-51.

象

持ち上げられ波打たせられて遂に動かなくなった
フジのように、その対抗する対抗された
鼠灰色の一對の象鼻の幹は 二本の鼻から
形作られながら闘っている 螺旋状の鼻の中の

溝を押しつけられた嵩張りの行き詰りと。それは
慈悲など全く求めない仮惜なき死闘ではないのか？ 唯の

気晴し、鼻が吸管で吸い上げておいた溜め水を
自らに雨と注ぎ降らせる時のように、あるいは—— 各々

40ポンドの大枝の正餐を供与する要があるので—— 葉の
繁った枝々を折り取る時のように。これら〈歯〉のテンブル騎士団員たち
これら匹敵し合う強烈なものたちは 際立った道具を
際立って使う。一頭は、若さの落ち着きを見せて眠りながら

大の字になって半乾きの太陽の斑らに当る河床で
狩猟用ラッパの曲線を描く鼻を浅瀬の石の上に休ませている。
その眠っている身体の傾斜している凹みは
穏やかに息づいている名士になりがちな

象使いが 生命なき6フィートの蛙のように眠っているのを
揺すっている、とても羽のように軽いのでその象の強ばった
耳は 交差した足の重さも意識しない。自らを
護り防がない人間たる物体はぐっすり眠っている まるで

硬い皺で切り込まれ、広い両耳が打ち出され、
無敵の耳を備え、魔法の体毛で安全を保っているかのように！
かのように、かのように、それは全くもしもだらけ、私たちは甚だ
不安なのだ。しかし魔法の産んだ傑作が彼らのもの——

フーディーニの安らかさが彼の恐怖を和らげている。
象の耳がやがて証人となる筈の聖歌と
栄光誦、これらの奉公者たちは 全く灰色か
白がかった灰色の両脚や鼻の持ち主で 巡礼者

風の瞑想を示しており崇拜をではない—— 誰も
祭司のいない宗教行進、
数世紀の入念を極めた稽古無しの
芝居。〈^{フック}釈尊の歯〉によって祝福されてその従順な獣は

自ら通りを祝福する歯状突起のある寺院として 見ているのだ
その白い象が、〈歯〉を運ぶ小箱を
運ぶ座布団を、運ぶのを、
自分と組にされているブヨたる保管人であるものに

素直に従って、彼は彼らを踏みつけたりはしない その白い
天蓋付きの青い座布団の上の〈歯〉が威風堂々
ゆったりと聖廟に戻されてゆく時。白は
崇拜と哀悼の色ながら、彼は

ここでは崇拜はしない筈だし、余りにも賢明なので
哀悼することもない——終身刑囚だがそれに甘んじている。
鼻をしっかり引き締め巻き上げて——象の
敗北のしるしだが——彼は抵抗した、だが今は

理性の子供。彼の真直ぐの鼻は言っているようだ、我々が
望み求めていたものが無に帰した時、我々は生き返ったのだと。
喪失も決してソクラテスの落ち着きを
変えられないように、平静さは工夫されるのだ

象によって。その墓石に蜂の巣が彫って
あった〈蜜蜂〉ソボクレスの場合同様
動物たちの中のソクラテスの色合いで優しさが彼の莊重さを
染め上げている。踏み段として使われ、耳の助けを得て

昇ったり降りたりするためにと差し出された
彼の前脚は 侵犯者である人間と生物たちとの
兄弟愛を説明する、知るという意味の
圏点付きの小さな語——動詞の覚るによって。

こういう覚知者たちは「人間と同族だという感情を
喚起する」し 自分たちの保管人と役割を交換できる。
苦難は兵士を作る、それから学習意欲は

彼を哲学者に仕上げる —— ソクラテスが

用心深く 疑わしいものを吟味しながら知ったように
 最も賢いのは 自分が知っているなどとはとても思わない人のことだ。
 虎に乗る人は決して降りることができない。
 象の上で眠っていれば、それは休息だ。

この作品には、『にも拘らず』の六篇の中では唯一、作者の自注がある。

自注：ここの詩節で使われている資料は、Charles Brooks Elliot による講演用フィルム *Ceylon, the Wondrous Isle* 『セイロン、不思議の島』から。そしてキケロは、ローマでの競技で象が犠牲にされるのを嘆いて言った、彼らは「哀れみと共に、象はどういうわけか人間と同族だという感情をも、騒ぎ立てる」と。George Jennison, *Animals for Show and Pleasure in Ancient Rome* 『古代ローマにおける見せ物と愉しみのための動物たち』

作中の引用文の出所が判るが、この詩も作者の該博な知識が、直かに、あるいは譬喩の形で、と縦横に織り込まれている。因に、「 temple [聖堂] 騎士団」は、1118年頃エルサレムで十字軍戦士によって設立され、1312年に解散させられた。米国にも同名のフリーメイソン系の結社がある。

「フーディーニ」とは、Harry Houdini [hú: dí: ni] (1874-1926) のことだろう。脱出奇術で一世を風靡したハンガリー生れの米国の奇術師で、一般に、巧みな脱出、抜け出すのが上手な人、を表わす普通名詞になった。

“Buddha”はサンクスリットの「覚った」=budh-に由来する。目覚める、気付く、理解する、つまり“know”で、圏点付きの“bud”は[búd]と読ませて(さもないと“bud”[bÁd]になり、芽、芽ぶく、などの意となる)2行目の“brotherhood”[-húd]と押韻させている。この作品は各連共に、2行目と4行目の行末を押韻させる。

ソクラテス(469-399B.C.)は所謂、否定的対話によって、人間の賢明さとは何かを吟味することを自ら天職としたのであり、ギリシャ悲劇の最盛期を代表するソポクレス(c 496-406B.C.)は「人間の尊厳に対する不拔の信念」(高津春繁)⁸を心奥に持ち続けて、死後は英雄としてデクシオン Dexion「受け入れる人」なる名を得たのであるから、賢く自分の運命を受け入れながら尊厳を保つ象を讃えるのに持ち出される人名としては、これ以上のものはあるまい。

この詩は、二頭の象が格闘技を人間たちにさせられている場面から始まるが、やがて象使いに使役させられている象の姿へと場面が移り、一頭の象と象使いの憩っている様子から、何かの儀式、祭礼かで〈釈尊 [ブッダ] の齒〉なる聖遺物を運ばされてゆく象の行進へと展開してゆく。フーディーニのように安らかな様子をしながら脱出も出来るのだという思いが象の恐怖心を和らげているのだと見、「ブヨたる保管人」「侵犯者」である人間と対比しながら「テンプル騎士団員」「覚知者」「奉仕者」としての象を、讚美した作品と、見えながら、やはり、例えばエンゲルの言うように、十分に身を護るものは知恵のある証拠だというムーアの詩の一例 (E. 102) ということになろう。彼の鑑賞を少し辿ってみよう。

最初の場面、二頭の象の力は互角で、その様子は殆ど静物画のようだ (E. 102)。それは幾つかの点で相対立し合うものの統合、混入というこの詩の主題の一つの象徴になっている (E. 102-103)。この試合は「気晴し」のようなどころがあるのだから、象たちは真剣に闘っているわけではない、と我々は告げられる。第3～6連は、対立物のように見えるもののもう一例——眠っている象とその身体の凹みの中で揺られながら眠っている象使いの姿——を提出する (E. 103)。象は、この男の重さには「無意識」であり、その男の姿勢はまるで自分自身が象であるみたいに安心していることを示している。冒頭の争いを演じている象たちとは異なり、この二つの生き物、獣と人間は、一体のようにみえる。以後、象について述べられていることは、人間に当て嵌められそうだが、ムーアは知っているのだ。人間と動物とは一つではないことを。たとえ見かけは「あたかも」そうである「かのように」であろうとも。詩人が望むような一体化を真理は認めないし、人間の解釈というのは「かのように」なので、ムーアは「私たちは／甚だ不安だ」と叫ぶのだ。人間は心身共に、望むような安全は得られない。平静を魔法のように手に入れるのは、象のみに可能な「傑作」なのだ。最後の10連は、それを入手することの本質を探求する。象は実際には、人間の活動に参加しない。セイロンの象たちは Kandy [現スリランカ中部の都市で、有名な仏教寺院がある] にある釈尊の齒の遺物を護る「齒のテンプル騎士団員」であるが、彼らの態度は「冥想であって崇拜ではない」。宗教儀式で彼らは考え深そうな雰囲気歩き、負けないでいられる望みのないものには抵抗はしないが、自らの独立を放棄することもしない。自然な行動の姿で行進してゆく象たちは、それ自体「宗教行進」になるものを形成する。自ら護る聖なる齒に祝福されて獣たちは、通過してゆく通りを祝福する。聖なる

齒そのものを運ぶ聖なる白象を見守りながら。

ブヨ〔双翅類吸血性の小昆虫〕めいた人間の指図に従いながら、その強力な白象は自らの肌にもそむく。白は「崇拜と哀悼の色」だが、その象は人間の文化に参加せず、「賢すぎて」自らの生き方を喪失するのを嘆いたりはしない。彼はムーアのお気に入りの動物同様、「終身刑囚だがそれに甘んじていない」。象は、象使いに追い立てられながら、自分で妨げることができないものは優雅に受け入れる知恵を発達させた囚人なのだ。最初捕えられた時には、負けて鼻を巻き上げざるを得なくなるまで抵抗したが、今は鼻を真直ぐ伸ばしている。彼は「理想」を身につけて「生き返」ったのだし、自分に課された条件下で威厳を保って生きようと決心したのだ (E. 103)。囚われの象は人間同様、自らが作ったり求めたり理想と思ったりしたわけでもない世界に生きていながら最善の努力をしているのであり、知恵を示して人間に範を垂れている。彼は自分の領域で、ソクラテスが自らの世界で賢明であったように、賢く、自分の荘重さに優しさで色付けている。征服者の望みを丁重に受け入れながら、彼は「兄弟愛」の範を示し、かくして本当の知恵の範を垂れる。彼はその行動によって、我々に、知るという意味のサンスクリットの動詞“bud”を思い出させる (E. 104)。実は、この詩の最後から二番目の連の最初の二語“*These knowers*”の後に詩集 *Nevertheless* では、「形を変えることも闇の中で体毛を二分することも出来ない」など、象には結局ブッダの魔力がないことを細かく示す8行ほどの叙述があった。それをムーアは『完全詩集』で除去したのだが、こういう部分は詩の動機を推し進めてゆくのに無益だからだと、エンゲルは指摘する (E. 104)。全くその通りで、現行の本文で十分である。

「覚知者たち」である象は、人間と同族であり、実際に人間と「役割を交換する」ことが出来るという考えが示唆されるが、最後の6行は、この考えを人間の方にあて嵌めようとする。「苦難は兵士を作る」は、不屈は苦難の経験を通して育つのだと、言い換えられよう、とエンゲルは言う (E. 104)。叡智は象と同様に、自らの知識について慎ましかであることのうちに存する。虎を行動のための模範だと考える人は、虎そのもの以外の如何なるものにも決してなれないが、象に頼る人は平静をもたらす知恵を発展させるのだ (E. 104)。

「象」の中でムーアはこう言っているのだとエンゲルは結ぶ。象が生き残るのは囚われの身にも拘らず勇気のお陰であり、勇気は深い叡智に護られながらも、単に受身であるとか抵抗するとかいうのではない一つの受容に、達しうるのであり、「平静」と呼ぶのが最適な、「死すべき運命」に対する精神上の勝利

に到れるのだ (E. 104-105) と。

この詩については、モウルズワースの次の一言——最後の2行の「標語」は、眠りと休息とを区別することで、偽りの活力と本物の力との人間にとっての違いを我々に示す典型的な語句の措置 (lexical move) である (Mo. 314)——を付け足すだけで、ここでは十分としよう。絡み合う象の鼻の描写に、植物のフジを持ち出したり、ぐっすり眠って無防禦状態の人間を「人間たる物体」と表現する冷厳正確な目を初めとして、注視してこちたき議論を展開しようと思えば切りがない作品なのだから。

四番目が、本稿の主題である「スウェーデンからの四輪馬車」である。五番目が、多数の種々様々な不調和や複雑さの魅力を呼びかけ (E. 105)、経験のやむを得ぬ混乱を受け入れることの重要性を説く (E. 106) “The Mind is an Enchanting Thing” 「精神は魅惑するもの」⁹ (CP. 134-35)。最後が、それは「偶然」だったが「戦争は我慢のならない不正なものだ」という事実への証言だと思っている、と作者自身が述べた¹⁰ “In Distrust of Merits” 「真価を疑って」¹¹ (CP. 136-38) である。後者の二篇は既に別稿で扱っているのでここでは触れない。

『にも拘らず』は、その六篇の詩全てによって、巻頭の標題詩の冒頭で「あなたは見てきたのだ」と呼び掛け始めた「あなた」なる読者に、ともすれば絶望に陥りそうになる〈にも拘らず〉、「我慢のならない不正」である「戦争」には不屈の勇気を振って、冷静に敢然と立ち向かおうと、多様多彩な形で訴えた詩集であった。「スウェーデンからの四輪馬車」は、その詩集の四番目に収録されたのである。

*

1966年に L. S. Dembo は、ムーアを、Wallace Stevens と William Carlos Williams と並べて、革新的な審美家で客観主義者 (aestheticist and objectivist) であると見、彼女にとって理想の精神とは、道徳上の正しさを身につけるために利己主義と感傷 (egoism and sentiment) を避けることが出来て、それによって特定のもの背後にある不特定を見定めてそれを表現できる精神のことだと指摘した。そして、そういう彼女の立場が仄めかされている一篇として、「スウェーデンからの四輪馬車」を挙げた (A 1. 93)。

このムーアの馬車は、今、名の挙げたウォレス・ステイーヴンズ (1879-1955) に、戦後世界を癒すのに必要な類の詩の生きた模範を与える (Sch. 169) ことになる。ステイーヴンズは、戦争は世界を非常に変えて枯渇させるだろう

から、美や信仰を表現すればそれは全て戦前の世界への素朴な郷愁にすぎないものになるのではないかという恐れを抱いたが、彼にはムーアの「スウェーデンからの四輪馬車」はそのような過ぎ去った年月に対する悲観的な見方を挑ねのけて平和の意味を回復するのに欠かせない、現在と過去との関係を示唆するもの、と映ったのである (Sch. 169-170)。

スティーヴンズはムーアとこの詩を讃えて、一篇の詩を書いた。彼も彼女同様、博物館の所蔵品を「愚かしい浪漫的な遺物」などとは見ず、「過去のものの持つ価値」を正当に評価できたのであり (Sch. 178)、ムーアが「現在の目的のために過去を回復させること」に深い関心を示したのである (Sch. 179)。

THE PREJUDICE AGAINST THE PAST ¹²

Day is the children's friend.
It is Marianna's Swedish cart.
It is that and a very big hat.

Confined by what they see,
Aquiline pedants treat the cart,
As one of the relics of the heart.

They treat the philosopher's hat,
Left thoughtlessly behind,
As one of the relics of the mind. . .

Of day, then, children make
What aquiline pedants take
For souvenirs of time, lost time,

Adieux, shapes, images —
No, not of day, but of themselves,
Not of perpetual time.

And, therefore, aquiline pedants find

The philosopher's hat to be part of the mind,
The Swedish cart to be part of the heart.

過去への偏見

昼間は子供たちの友人。
それはマリアンナのスウェーデンの馬車。
それはあれであり非常に大きな帽子。

自分が見ている物に制限されて、
鷺のような術学者たちがその馬車を扱う、
心の遺物の一つとして。

彼らはあの哲学者の帽子を扱う、
考えもなく後に取り残されて、
精神の遺物の一つとして……

昼間から、それで、子供たちは作り出すのだ
鷺のような術学者たちが 時の 失われた時の
記念品と思いだうものを、

さらば、姿形よ、心象よ ——
いや、昼間ではなくて、彼ら自身のを、
永遠の時のではないのを。

それで、それ故、鷺のような術学者たちは見いだすのだ
その哲学者の帽子は精神の一部なのだ、
あのスウェーデンの馬車は心の一部なのだ。

ムーアの一大商標、トレード・マークであった三角帽子を「哲学者の帽子」と表現している。ステイーヴンズは、精神と心 (mind and heart) を生涯問い続け、詩論詩、芸術論詩、哲学詩を書き続けた審美・象徴詩人で、ムーアの先駆者ともいえる。スウェーデンからの馬車は、ムーアの心の一部になってい

たのと同時にスティーヴンズの心の一部になったのであり、こうしてそれは読者の心の一部になってゆく。

エリザベス・ビショップ (Elizabeth Bishop, 1911-79) は、1944年10月9日付きの手紙で、新刊の *Nevertheless* を読んで、その感動をムーアに伝えた。「象」では、「若さの落ち着きを見せて眠りながら／生命なき6フィートの蛙のように／眠って、羽のように軽く、…」が、すっかり寛いでいるように受け取れて特に好きだ、「魔法の体毛」も、そして勿論、「彼は／ここでは崇拜はしない筈だし余りにも賢明なので／哀悼もしない」というのは、これ以上優れた書き方は出来ないし、勿論、最後の2行も。でもこの作品は全てが気に入った。「精神は魅惑するもの」の均衡の取れた空中に宙吊りになっている特質に魅了される、と述べて、細々した部分、字句の端々に触れ、「森イタチ」は大好きだ、最後の「森イタチだけを私の付き合う相手にしよう」の一文をお母様が朗誦なさるのが聞こえるようだ、と如何にも彼女らしいことを書いた。ビショップはしばしばムーア母子を訪れ、ムーアの母からも可愛がられたのである。

「スウェーデンからの四輪馬車」はどこにあるのですか。私はそれを見たいです。「ブルックリン」という語を見て嬉しかった [ムーアが住んでいたのである] し、そこを表わす「染みだらけの／完全さ」が好きです、と書いたビショップは、「妥協に…岩々の列島」は、音も素晴らしい、「緑の幹から、独力で扇のように／拡がってゆく緑の棚また棚から」のトウヒの木の箇所は、私を直かに Nova Scotia [ビショップが母方の祖父母と幼児期をすごしたカナダ北東部] へ連れていってくれる。全てSのある最終連は、素敵で堅固な響きがして、そこも好きだと、要するに絶讃したのだった (G. 119-20)。学生時代に出逢って以来、よき指導者・助言者 (mentor) として親身な愛情を惜しみなく注いでくれるムーアに、ビショップも絶えず応え続けた。この時、ムーア57歳、ビショップ33歳。二人の親交はその後も30年近く、ムーアの死まで、いや、ビショップの死までも続くことになる。それは我々読者の心の中で、今も美しく続いている。

先刻触れたハーバードでの詩の朗読会で、ムーアは W. H. オーデン (1907-73) の名を挙げていたが、彼もムーアを直かに訪問して以来30数年間、彼女と親交を結び続けた詩人である。彼がムーアの80歳の誕生日に、彼女へ寄せた祝詩 “A Mosaic for Marianne Moore (on the occasion of her eightieth birthday, November 15 th, 1967)” 「マリアン・ムーアへのモザイク」¹³ は、5行7連、計35行の作品で、殆半世紀に亙るムーアの詩作をさっと一望に収めた言

及の、文字通りのモザイクによって、彼女の人と詩の本質を垣間みせて鮮やかなものであったが、その最終連は、「スウェーデンからの四輪馬車」の詩句を活用して締め括られていた。

For poems, dolphin-graceful as carts from Sweden,
our thank-you should be a right
good salvo of barks: it's much too muffled to say
“how well and with what unfreckled integrity
it has all been done.”

スウェーデンからの馬車のようにイルカの優雅を示す詩には
私たちのあなたへの感謝は しかるべき一斉射撃の
砲声となる筈です。それでも余りにも口籠りすぎです
「何と美事に何と染み一つない完全さで
それは成されてきたことか」と言うには。

ムーアの詩業を「何と美事に何と染み一つない完全さで成就されてきたことか」と讃えるには、一斉射撃の砲声ほどの轟音を上げて、まだ口籠りすぎる程だ、とムーア風の趣向を凝らした表現であった。「染み一つない完全さ」「unfreckled integrity」とは、ブルックリンに与えられた、そしてビショップに好きだと言わせた「染みだらけの完全さ」(第2連)に、否定の接頭語(un-)を付加したものであり、「イルカの優雅を示す」「dolphin-graceful」(第11連)は、そのままの利用である。「優雅」「grace」を殊の外に重視したムーアであるが、彼女の使う“grace”は、「形式の変換と機能の災難との平衡を確保するという意味」だ(C. 116)と言ったコストロは、「スウェーデンからの四輪馬車」には、その標題にすら一度も一言も触れていない。Neverthelessにも他の五篇には色々と言及しているのに。優美で頑丈な手作りの「スウェーデンからの四輪馬車」は、鋭敏で徹底したムーア研究者のコストロにも、声を吞ませたのであろうか。

ムーアの言葉の芸術性に思いを凝らした Marie Borroff は、この作品の最後から二番目と三番目の2行の中に、Sが大文字、小文字合わせて8回現われていることに注目して、作中に、曲線と直線との相補関係を見い出した(B. 58)。それが、目に見えない処で、外観と構造、優雅と力、この詩の結末部の言葉を

使えば「表面」と「頑丈さ」という一層深い関係を表し、この二つの特質は、製作者の「技術」によって、馬車において結びつけられているとボルロフは指摘する。彼女は、また、作中に気取りのない慎ましさを見て取り、それは、ムーアが詩の中では“carriage”ではなく“cart”を選んで使っている（3回）こと、及び、この馬車の製作者が最後の箇所、自らを民芸作家、創造芸術家などと看做さずに職人だと考えていることと呼応すると言う。この詩の語り手は、想像の上で、スウェーデンの精神は力に基づいた優雅なのだと定義していると見るボルロフは、それが作中で具現化されている例を細かに挙げて、こう見てくれば厚底の靴で長靴下を穿いての舞踏と、デンマークに庇護されたユダヤ人たちという異質なものの並列も、各々、肉体上の優雅さと倫理上の力を表す具体例だとなって、それ程奇妙とは思われなくなる、と納得させてくれた。ムーアにあっては、美と倫理とは、一つにして同じものなのだと、ボルロフは示してくれた（B.59）のである。美と倫理の融合という難事を、ムーアはこの作品でも実践しようとしてみせたのである。

スウェーデン製の馬車〔作り〕は私の職業だと、静かに矜持を示す職人の姿は、いつの間にか、作品の語り手と重なってゆき、こういう馬車を提供するのが私の職業だという密かなムーアの自負を浮上させる。我々読者は、ムーアの作り差し出してくれる乗り物、それも自動車などではなく、あのスウェーデンからの馬車のような、優雅で堅牢な、心の籠った手製の乗り物で、ここから彼方へと運ばれてゆくことになる。ムーアは、我々の足になってくれる乗り物なのである。

注

1. 引用・言及書は以下のように略記し、そのページ表示を括弧内に数字で示す。

- CP. *The Complete Poems of Marianne Moore* (New York: The Macmillan Co. / The Viking Press, 1981)
- A 1. Craig S. Abbott, *Marianne MOORE: A reference guide* (Boston: G. K. Hall & Co. 1978)
- A 2. Craig S. Abbott, *Marianne Moore: A Descriptive Bibliography* (Pittsburgh: University of Pittsburgh Press, 1977)
- B. Marie Borroff, “Marianne Moore’s Promotional Prose” in Harold Bloom, ed., *Marianne Moore* (New York, New Haven, Philadelphia: Chelsea House Publishers, 1987) pp. 43-72.

- C. Bonnie Costello, *Marianne Moore: Imaginary Possessions* (Cambridge: Harvard University Press, 1981)
- E. Bernard F. Engel, *Marianne Moore* (New York: Twayne Publishers, Inc., 1964)
- G. Robert Giroux, ed., *Elizabeth Bishop: One Art* (New York: Farrar, Straus and Giroux, 1994)
- H. Pamela White Hadas, *Marianne Moore: Part of Affection* (Syracuse: Syracuse University Press, 1977)
- Ho. Margaret Holley, *The Poetry of Marianne Moore: A Study in Voice and Value* (Cambridge: Cambridge University Press, 1987)
- L. Linda Leavell, *Marianne Moore and The Visual Arts: Prismatic Color* (Baton Rouge: Louisiana State University Press, 1995)
- M. Taffy Martin, *Marianne Moore: Subversive Modernist* (Austin: University of Texas Press, 1986)
- Mil. Christance Miller, *Marianne Moore: Questions of Authority* (Cambridge: Harvard University Press, 1995)
- Mo. Charles Molesworth, *Marianne Moore: A Literary Life* (New York: Atheneum, 1990)
- P. Joseph Parisi, ed., *Marianne Moore: The Art of a Modernist* (Ann Arbor: UMI Research Press, 1990)
- Ph. Elizabeth Phillips, *Marianne Moore* (New York: Frederick Unger Publishing Co., 1982)
- S. Grace Schulman, *Marianne Moore: The Poetry of Engagement* (Urbana & Chicago: University of Illinois Press, 1986)
- Sch. Robin G. Schulze, *The Web of Friendship: Marianne Moore and Wallace Stevens* (Ann Arbor: The University of Michigan Press, 1995)
- St. Laurence Stapleton, *Marianne Moore: The Poet's Advance* (Princeton: Princeton University Press, 1978)
- W. A. Kingsley Weatherhead, *The Edge of the Image: Marianne Moore, William Carlos Williams, and Some Other Poets* (Seattle and London: University of Washington Press, 1967)
- Wi. Patricia C. Willis, ed. & Intro., *Marianne Moore: Woman and Poet* (Orono: University of Maine, 1990)
2. 拙稿「機会詩人の画家と連想——マリアン・ムーアの世界」(本誌No. 25, 1994・3・25)に訳あり。
3. 拙稿「輻輳を内蔵した〈擬装〉——マリアン・ムーアの世界」(本誌No. 24, 1993・8・31)に全訳あり。
4. 拙稿「生命に貫入する視線——マリアン・ムーア小考」(「アメリカ文学評論」第11号, 1990夏)に全訳あり。

5. 拙稿「マリアン・ムーアの世界 (11) —— この上ないものとしての芸術」(「楡」No58. 1993・1) に全訳あり。
6. 上記3の拙稿に全訳あり。
7. 拙稿「エリザベス・ビショップ と マリアン・ムーア」(*American Literature Tsukuba*, No 2. 1987・1・30) に全訳あり。薄くて白い紙のような貝殻をもつ貝, アオイガイは, ビショップがムーアに贈ったものであった。
8. 『ギリシャ悲劇全集 第二巻』(人文書院, 1965.重版) p.30. p.12.
9. 上記3の拙稿に全訳あり。
10. Donald Hall との *The Paris Review* 誌上での会見 (1965) で (Ph.199)。
11. 上記4に全訳と評論あり。
12. *The Collected Poems of Wallace Stevens* (New York: Alfred A. Knopf, 1961) pp.368-69.
13. 拙稿「染み一つなき完全無欠 —— オーデンとムーアの交流」(「筑波イギリス文学」第2号, 1996・11・11) に全訳と評論あり。

Summary

This paper discusses “A Carriage from Sweden”, one of the most excellent poems by Marianne Moore, with its new translation into Japanese by the present author, examining more than twenty main readings, views and interpretations of the poem.

It has also four other new Japanese translations by this writer, three of which are Moore's pieces and the rest, Wallace Stevens'. The former includes “Nevertheless”, “The Wood-weasel” and “Elephants”, which are all in *Nevertheless*, the same collection including “A Carriage from Sweden”, and the latter is “The Prejudice against the Past”, in which Moore and her poem in question are both admired.

“A Carriage from Sweden” is another typical instance in which aesthetic pleasure merges with moral approval, and is entirely characteristic of Moore whose poetry carries us the readers far and beyond as a vehicle, this paper concludes.

This small paper is dedicated to Professor Yasuo KITAHARA, who is to be, in this April, inaugurated as President of University of Tsukuba.